草木成仏と木画本尊の意神について

株橋諦秀

目次

序論
一、問題の重要性……(2)
二、草木成仏との関連法門……(5)
三、草木成仏と木画本尊の意神についての本尊抄の文……(7)
四、木絵二像開眼の意義……(12)
本論
天台家の説
一、荊溪湛然の非情仏性論の要領……(14)
二、伝教大師の十界皆成説……(19)
三、智証大師の草木成仏説……(22)
四、慈慧良源の所説……(23)
五、東陽房忠尋の所懐……(24)

草木成仏と木画本尊の意神について
六、宝地房証真の見解……(26)
法華宗の説
一、宗祖日蓮大士の草木成仏と木絵二像の意神とについての説……(28)
㈠ 草木成仏の原理……(29)
㈡ 草木の下種成仏……(31)
㈢ 木絵二像開眼の教法……(33)
二、日隆聖人の草木成仏に対する所釈……(36)
㈠ 当宗の草木成仏の教理的根拠……(36)
㈡ 爾前・迹門の草木成仏論を評破す……(37)
1、爾前諸経の草木成仏論を評破す……(37)
2、法華迹門の草木成仏論を評破す……(38)
㈢ 本門所談の草木成仏義……(40)
㈣ 草木の発心修行の事相成仏……(43)
結　論……(46)

序　論

一、問題の重要性

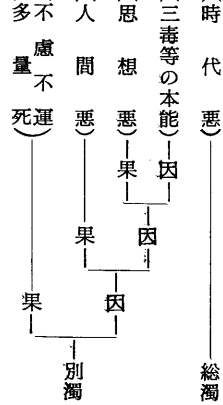
宗教において我等衆生の信仰対象たる本尊の重要なることは今更いうまでもない。宗教の成立条件として、礼拝の

対象たる本尊（仏宝）と、仏陀所説の教義及びその所詮の大法（法宝）と、本尊を礼拝し仏陀の教説に従てその所詮の大法を信行護持する信徒（僧宝）とが挙げられるが、その三条件中本尊は最も根本的信条であって信仰の対象たる本尊なくしては既に宗教は成立しないのである。

然らば宗祖日蓮大士にとって、その本尊たるものは一体如何なる存在であるか、またその本尊を実際の信仰上如何ように表現すべきであるか等の問題を観心本尊抄に取扱われているのである。この問題の解決が即ち草木成仏と木画本尊の意神という法義であって、これは我々門下一般に重要視しなければならない本尊抄一部中の主要法門の一である。

観心本尊抄はその題号に特に「如来滅後五五百歳始」の九字が冠せられていることに留意しなければならない。これは正しく宗祖が滅後五濁悪世の今日を予想し、大慈悲を以って今日の人人の宗教心を喚発せしめんとして撰述せられた末法の未来記であると信ずるものである。

（註）



今日のこの五濁悪世は何によって招来されたか、それはいうまでもなく人間各自の本能満足の欲求による物質重視、精神不顧の結果である。物質至上主義は今日の自然科学の長促の進歩を来した、ところがその所産として自然界の破

壊、人間環境汚染が極度に達し、既に人間がこの地球上には安閑として生活できない域にまで来ている。今日の自然科学の進歩による物質文化は人間を怠慢にするばかりでなく、虚空よりも大きく大地よりも重い「いのち」を何時いかなる処で喪失しなければならないかの不安に陥れている。仏教ではその本地を四天王であるとし、またその本地を本化四菩薩であると説かれている大地（地大）も空気（風大）も水（水大）も太陽の光線（火大）もすべて汚染されてゆく今日の時代であって、自然界が自然のままで存続することができず、人間も動植物も一切、生活・棲息し難い状態に追い込まれている。今日世を挙げて人間環境の浄化・公害病の対策医療・自然の復元・野禽鳥虫類等の保護・工場廃棄物の処理等の諸問題が研究されていることは現前の事実である。

仏教殊に天台家・当家で論ずる草木成仏の法門はもと非情（衆生の生存環境たる大地草木土石等の自然界）成仏の問題であって、我等人間はもとより一切衆生の生存・生活の環境を完全ならしめる教義である。この故に草木成仏といっても単に草木のみの成仏をいうのではなく、日月・山河・大地・土石より禽獣・虫類等に至るまでの一切の成仏を意味するものである。今日我々人間の誤れる考え方は山河大地草木等外界の事物は皆、独り我等人間の生存・生活の為の存在であるとして来たことである。仏教における成仏は有情（情識を有するもの）の衆生のみの成仏をいうのではなく、我等人間と共に草木・国土等一切の成仏即ち仏国・宝土の実現を意味するものである。ここにおいて考へられなくてはならないのは人間の成仏よりも先決は非情自然界の成仏にあるといわなければならない、でなければ我等人間の成仏は保証されないのである。

ここにおいて我等仏教徒殊に法華宗徒は、この草木成仏の法門を理解し、延いては十界依正本尊の法義をよく研究しなければならない。宗祖奠定の十界互具の曼陀羅本尊は十界の依正（有情非情）万法悉く仏・菩薩化し而も各自相互間における能所の関連性を示して以て、之を信仰の対象としたものである。此の如き仏・菩薩としての依正万法が客観的

世界に実現するとき、始めて我我人間の完全なる生存・生活、即ち真の成仏があるのである。

この草木成仏の法門は非情仏性の問題として支那仏教において既に一三〇〇年の往昔より論ぜられて来たもので、今日に始められた法義ではない、否もっと古く印度仏教において既に論ぜられていたものである。

二、草木成仏との関連法門

草木成仏の法門と最も接近せるものに泥木図像の本尊義と無性有情の成仏義があり、なお之に関連せるものに俗諦常住の義がある。この四種法門は天台家における論義二百題中の算であって、草木成仏は宗要の六即義の算、泥木図像は問要の、無性有情は宗要の仏性義の、俗諦常住は義科の二諦義の一の算である。この四種の中無性有情の成仏義は法相宗の五性各別説による無性有情不成仏の義を破し、草木成仏の義は華厳宗の有情仏性（覚）非情法性（不覚）にして非情の草木は成仏せずという義に対し、俗諦常住は別教の真諦常住・俗諦無常の義を評し、泥木図像の義は別教の泥木図像はただ色相にして真仏にあらずという義を破したものである。今右四種法門の関連性を宣べてみよう。

俗諦常住、先づ法界の全体において真俗二諦と分つに、真諦（法界の本体＝実相）は本より不生不滅常住なれども、俗諦（法界の現象＝諸法）は如何んという問題について、法華円教の意は経に「是法住法位世間相常住」とあるが如く、俗諦も真諦と同じく不生不滅なりというべきである。何となれば真諦の三千三諦の真如実相が全体そのまま顕現したものが現象界の諸法の三千である。この故に「真如是レ万法、万法是レ真如」（荊溪）、即ち実相即諸法、諸法即実相であって、真如が不生不滅であるならば俗諦もまた不生不滅でなければならない。

之を別教の立場より論ずるならば、真諦法性の妙理は不生不滅であるが、俗諦の諸法は有為無常にして人に生死があり物に凋変がある、故に俗諦は生滅であって、真諦のみ不生不滅であるとするのである。これは全く凡夫の情見で

あって円教の意ではない、円教の意は起滅流動する世間相の当処、そのまま真実不改なるが故に俗諦は不生不滅にして常住である。これが所謂「俗諦常住」の義である。

無性有情、この常住なる俗諦に依正二報即ち有情・非情の別がある。俗諦既に三千三諦にして真諦と一体不二、不生不滅であるから、有情も非情もなんらの隔てなく倶に三千三諦を具して常住である。この有情の中に有性・無性の別を立て無性有情は不成仏なりと論ずるのが法相宗の五性各別説である。

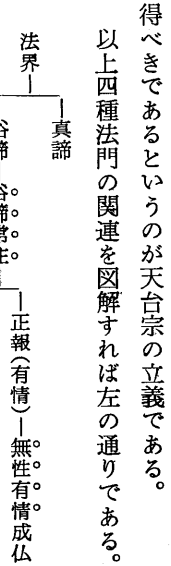
これに対し天台円宗の意は、有情たる十界の聖衆は平等にして悉く三千三諦の仏性を具する故に、この仏性開発によって一切衆生皆悉く成仏するのである。ここを法華経には「欲令衆生開示悟入仏之知見」等と説き、天台宗では十界皆成の法門というのである。この故にたとえ一闡提極悪の衆生といへども、他の三五七九の衆生と同じく仏性を本具して終に成仏するのである。これが「無性有情」成仏義である。

草木成仏、上の無性有情成仏の義は有情についての法門であるが、之を非情の上において論ずるならば、非情の山河大地の成仏であり、また草木成仏の法門である。華厳宗の如きは真如随縁して有情の辺にあるを仏性と名け、無情の辺にあるを法性というのであると説くが、これは仏性と法性とを差別するものであって、是れ円教の意でなく別教を帯する証拠である。これに対して天台宗では法華経は「諸法実相」と明し、涅槃経は「仏性体遍」の義を説き、天台大師は止観に「一色一香無非中道」と釈している。この故に仏性は有情・非情を隔てず両者に具足している。既は非情の国土・草木にも仏性を具するが故に必ず成仏すべきであると論ずるのである。かくの如く天台宗では有情について無性有情の成仏を説き、非情について草木成仏を論ずるのである。

泥木図像、上の草木成仏の義より考うれば泥木紙墨を以て作れる仏像はなく真仏であるというべきである。天台宗の意では諸法は本真如であって一切法皆仏法である。この故に山河・土地・草木等より翼飛・蠕動の

微塵に至るまで悉く法身の体を本具せる変化の応仏である。三身既に即一の故に一切万法悉く本有の三身如来である。されば泥土・草木等も悉く変化の応仏であるから、これらを材料として造れる木画二像は何れも真仏にあらずというものはない。仍て泥木図像に対し我等は真仏の想ひをなしてこれを拝するならば、必ず霊験があって無量の福を得べきであるというのが天台宗の立義である。

以上四種法門の関連を図解すれば左の通りである。



上来述べたところは外宜天台の意によって理具一念三千を根本として記したもので未だ内鑑天台の意ではない。天台内鑑当宗の意は事具一念三千依正互融の義を基盤として述べなければならないが、是れ後に至って明らかとなるから今はこれを略する。

三、草木成仏と木画本尊の意神についての本尊抄の文

草木成仏と木画本尊の意神を説ける本尊抄の文は、本抄通じて全三十問答ある中、第九・十・十一の三問答の文と第十九問答中の答釈の文とである。初の第九乃至第十一の三問答の文は、当家の事具一念三千を顕さんがための前提たる台家所談の理具一念三千の理による草木成仏・木画本尊意神を明せる文であり、次の第十九問答の答釈の文は当家所談の本門事具一念三千の仏種による草木成仏・木画本尊の意神を説ける文である。

草木成仏と木画本尊の意神について

先づ初に台家の迹門理具一念三千の理による草木成仏等の文を挙げれば左の通りである

第九問答

問云、百界千如与二一念三千一差別如何。

答曰、百界千始限二有情界一、一念三千亙二情・非情一。

第十問答

不審云、非情亙二十如是一、草木有レ心如二有情一可レ為二成仏一如何。

答曰、此事難信難解也。天台難信難解有レ二。一教門難信難解、二観門難信難解。

其教門難信難解者於二一仏所説一爾前諸経二乗・闡提未来永不二成仏一。教主釈尊始成二正覚一。来二至法華経迹本二門一壊二彼二説一。一仏二言水火也。誰人信レ之。此教門難信難解也。

観門難信難解百界千如・一念三千非情之上色心二法十如是也。

雖レ爾於二木画二像一者外典・内典共許レ之為二本尊一。於二其義一出レ自二天台一家一。草木之上不レ置二色心・因果一木画像奉レ恃二本尊一無益也。

第十一問答

疑云、草木国土之上十如是因果二法出二何文一乎。

答曰、止観第五云、国土世間亦具二十種法一。所以悪国土相性体力等云。釈籤第六云相唯在レ色、性唯在レ心、体力作縁義兼二色心一、因果唯心、報唯在レ色等云。金錍論云、乃是一草一木一礫一塵各一仏性各一因果具二足縁了一等云。

以上本尊抄三問答の文を釈すればこのような意である。情・非情依正万法の仏性は一念三千という真如である。玄義・文句二部の教相書には百界千如の義を説くが未だ一念三千の法性を説かない。この百界千如では未だ真の法界の真

如とか実相とかいうことはできず、従って未だ情・非情の真の仏性と名くべきではない。何となれば百界千如は有情界（正報）のみに限る実相であり仏性であって未だ非情界には亘らない。実相とか仏性とかいうものは情・非情、依正万法に遍在するものでなければならない。これに異り観心書たる止観に明す一念三千の法体は情・非情に亘る真如であり仏性である。この故に非情たる草木・土石等にも一念三千の仏性を具有しているのである。

ところで非情なる草木・土石等に三千法性を具するということは、陰・生・土三世間依正二報に亘って具備する十界・十如である。十界の依正二報即ち情・非情に十如是を具するということは、非情たる草木・国土にも色心の二法・因果の功徳を具していることである。其の証文は摩訶止観・釈籤・金錍論の文である。摩訶止観の「国土世間亦具十種法」等の文は非情の国土世間にも十如是を具することを証し、釈籤の「相唯在色」等の文は十如是は要するところ色心の二法であることを証するもの、十如是が色心の二法であるということは有情の衆生のみならず、非情たる草木・国土にも色心の二法を具していること、即ち非情といへども色法のみを具するのでなくて、心法をも備へていることであって、草木にも心を有していることである。草木にも心を具しているから、当然有情と同じく仏性を具足していることである。この非情有仏性の旨を縷々説いたものが金錍論である。故に金錍論の「乃是一草一木」等の文は非情たる草木・土石等も因果不二の正了縁の三因仏性を具することを証するものである。

（註）

此の如く非情の草木・国土にも三千を具する、三千を具すということは既に十如是を具すること、十如是を具する

ことは草木・国土にも色心・因果を具することである。色心を具することは草木も有情の如く心を有すること、心を有するが故にその心に三千仏性を具して有情の如く仏性を開発して終に成仏すべきである。これが法華経における迹門の二箇の大事なる二乗作仏（記小）・久遠実成（久成）の法門で、これを本抄には教門の難信難解というのである。法華経の「欲令衆生開仏知見」とあるのは記小・久成の十界有情の成仏のみを顕すようであるが、非情の上でいへば草木成仏である。この有情・非情の成仏の原理たる一念三千の法門がいわゆる観門の難信難解である。

要言すれば非情の草木・土石も本来有情の如く三千を具する、この理性本具の三千を仏性（成仏の種子）と名けるのである。草木既に三千の仏性を具するが故に、有情と同じく必ず成仏すべきである。この故に本具の三千仏性が草木紙墨を以て造れる木画二像本尊の意神となるのである。

ここで問題となるのは、草木・土石等既に本来三千仏性を具するが故に成仏すべしといへども草木・土石が有情と同様に発心・修行して成仏するのか、即ち果して草木・泥土に聞法・発心・修行・覚道の能力を具有しているのか否かの点である。この問題に対しては本抄第十八問以後に、天台家の理具一念三千論より更に進んで当家事具一念三千の義域に入って始めて解決されるものである。

次にその当家の事具三千論による情・非情の成仏・木画本尊の意神の文を挙げれば左の通である。

第十九問答中の答釈

無量義経云譬如国王夫人新生王子。……是持経者亦復如是。諸仏国王是経夫人和合共生是菩薩子。……等式。

普賢経云、此大乗経典諸仏宝蔵、十方三世諸仏眼目。乃至出生三世諸如来一種。乃至汝等行大乗不断仏種等式。又云此方等経是諸仏眼、諸仏因是得具五眼。仏三種身従方等生。是大法印印涅槃海。……等式。

と無量義経と普賢経の開結二経の文を引用して後に、第十九答の結論として

雖レ然所レ詮 非二一念三千仏種一者有情成仏・木画二像之本尊有名無実也。

といはれている。

今引用の無量義経の文は本門事具一念三千の法体の構成を表せるもので、事具三千は境智冥合・十界互具によって始めて成立するものなることを顕したものであり、普賢経の文はこの事具一念三千の法体は仏果を成就し仏眼を備ふに至る真の仏種なることを示したものである。今事具三千を委説することを避けて、無量義経の文意によってその法体の成立を左に示せばこうである。

境―理境の三千（王妃）
智―本仏の智慧（国王）
―冥合―本仏の一念三千―法界荘厳の事具三千―成仏の種子（王子）

ここにいう境とは法界万有に本来遍在せる客観的法理たる理具三千であり、智とはこの境に相応せる久成本仏の金剛智であって、法界の理境たる三千が本仏の智慧によって証得されるとき、本仏内証の三千となり、この三千が更に本仏の慈悲によって法界の依正万法として具現し荘厳されて始めて事具一念三千となるのである。されば法界の万法一としてこの事具三千を備へざるものなき故に、情・非情を問はず何れも本仏の分身即ち仏子である。ここを経文には「今此三界皆是我有、其中衆生、悉是吾子」と説くのである。この故に事具一念三千は情・非情に亘って将に仏果を成就し仏眼を円備すべき仏種であると証するのが普賢経の文である。従って本門の事具一念三千の法体が真の草木成仏の種子であり、滅後の本画本尊開眼の意神となるのである。

四、木絵二像開眼の意義

一般に開眼とは木絵の仏像に意神（たましい）を入れ、その意神の眼を開かしめることである。これに事理の二がある。即ち事の開眼と理の開眼である。

事の開眼とは仏師が仏像を刻み、或は画家が仏像を畫いて最後に眼を入れることであり、理の開眼とは僧が経巻を読んで木絵二像をして仏眼を開かしめ仏意を成就することである。法華経の結経たる観普賢経に云く、「此ノ大乗経典ハ諸仏ノ宝蔵ナリ、十方三世諸仏ノ眼目ナリ、三世ノ諸ノ如来ヲ出生スル種ナリ」といい、また「此ノ方等経ハ諸仏ノ眼ナリ。諸仏ハ是ニ因テ五眼ヲ具スルコトヲ得タマヘリ。仏ノ三身ノ身ハ方等ヨリ生ズ。是レ大法印ニシテ涅槃海ヲ印ス。此ノ如キ海中ヨリ能ク三種ノ仏ノ清浄ノ身ヲ生ズ。此ノ三種ノ身ハ人天ノ福田、応供ノ中ノ最ナリ」と。これ木絵二像の開眼は法華経に拠るべきことを示されたのである。

今木絵二像の開眼を当家の立場より解すれば左記の如き段階がある。

先づ仏師又は画家によって刻まれ画かれた仏像本尊は、他の力を俟って始めて意神が入れられるのではなく、木像・画像それ自体が本来本有として仏体であり仏眼を本具していることを了解しなければならない。何となれば法華経の立場より見れば一念三千依正互融の故に木絵二像の材質たる草木泥土既に仏体たる故である。

この故に次に法華経（十界の依正万法悉く仏体たる旨をあらはす一念三千の理を説く故に）を読誦して本具の仏眼を開発せしめ、本来仏体たることを自覚せしめるのである。

先づ初めの木絵二像自体が本有の仏体であることにおいて、理具（理性）と事具（事成）との不同があり、従って次の読経の開眼供養においても迹本理事の相違が存するのである。

一、理具に約する開眼の意をいはば、これ天台家所談の迹門理具三千によるもので、木絵二像の素材たる草木泥土それ自体が本来理性に三千三諦の仏性を具するが故に、本来真仏であって単なる色相の偶像ではない。しかしこれを開眼しなければ本尊となり得ない。この故に法華経を読誦して本有性徳の仏眼を開発せしめなければならない。この場合の法華経はいうまでもなく諸法実相理具一念三千を所詮とする迹門法華経（法華経一部が迹門を面とする）である。

二、事具に約する意はこれ当家所立の本門事具三千によるもので、木絵二像の当相に事具三千の法を具足する故に木絵の仏像そのまま仏体であって、何れも久遠成道の本仏釈尊の色心であり、分身（ぶんしん）の舎利である。このことを提婆品に説いて「三千大千世界ヲ観ルニ、乃至芥子ノ如キ許（バカ）リモ是レ菩薩ニシテ、身命ヲ捨テタマフ処ニ非ルコト有ルコトナシ衆生ノ為ノ故ナリ」というのである。この故に凡夫の迷見にては草木を材料とし刻彫範金を以て作成せる単なる偶像と疑はれる木絵二像も、本有の三因・四徳たる性徳の本仏如来である。この性徳本有の仏体を自覚し仏眼を開かしめんとするには、当然本因本果事具一念三千の仏種・仏眼を所詮とする本門法華経（法華経一部悉く本門を以て面とする）を以て読誦供養しなければならない。このとき始めて本有の仏眼を開発し本具の四徳を自覚して真仏となるのである。

三、以上の開眼供養は理具三千による性徳の仏性開発か、或は事具三千による本具の仏種開発かの相違はあっても、草木泥土の本尊それ自体からすれば未だ修徳の聞法・発心・修行・覚道の成仏、即ち真の開眼供養とはならない。草木泥土が実際に発心修行して木絵二像本尊として一切衆生の前に仏眼を開き仏徳を示さなければ本尊としての価値はない。「仏種ハ縁ニ従テ起ル是ノ故ニ一乗ヲ説キタマフ」で、性徳本有の三身・四徳を開発しこれを増長し修顕せしめんが為に、本地最勝の教縁たる総名の妙法蓮華経を読誦唱題して、その木絵本尊に聞法下種せしめなければならない。かくするとき草木泥土の本尊は発心修行するのである。これが真の草木成仏であり、真の刻木図像に対する開眼供養であって、これ宗祖大士の本懐、当宗肝要の奥義である。

以上の義を図示すれば左の通りである。

木絵本尊の開眼
- 一、約理具―迹門法華経による―
- 二、約事具―本門法華経による―
- 性徳開発
- 三、約下種―本地妙法蓮華経による―修徳成仏

本　論

天台家の説

一、荆渓湛然の非情仏性論の要領

支那天台宗の中興、第六祖荆渓湛然（七一一―七八二）の非情仏性の義は、輔行一の十義・金錍論に専ら之を説き、なお止観義例・涅槃再治疏等にも之を明している。その立論の趣旨は大体釈籤六所載の十不二門の義によっているといってよい。今輔行一の十義と金錍論とによって彼の非情仏性・草木成仏の義を示そう。

輔行一（台師全、止一、九六）に云く

此ノ色香等ヲ世人咸ク謂テ以テ無情ト為ス、然モ亦共ニ色香中道ヲ許シテ無情仏性ニハ惑耳驚心ス。今且ク十義ヲ以テ之ヲ評シ理ニ於テ惑ハザラシム。余ハ則チ例シテ知レ。

一ニハ身ニ約ス。仏性ト言フハ応ニ三身ヲ具スベシ、独リ応身ノ性アリト云フベカラズ。若シ三身ヲ具セバ法身遍キヲ許ス。何ゾ無情ヲ隔テン。

二ニハ体ニ従フ。三身相即シテ暫クモ離ルル時ナシ。既ニ法身、既ニ一切処ニ遍スト許サバ、報応未ダ嘗テ法身ヲ

離レズ、況ヤ法身ノ処ニ二身常ニ在ルヲヤ。故ニ知ンヌ三身、諸法ニ遍スルコトヲ、何ゾ独リ法身ノミナランヤ。法身若シ遍セバ尚ホ三身ヲ具ス、何ゾ独リ法身ノミナラン。

三ニハ事理ニ約ス。事ニ従ヘバ則チ情ト無情トヲ分ツモ、理ニ従ヘバ則チ情・非情ノ別ナシ。是ノ故ニ情ニ具スレバ無情モ亦然ナリ。(以下略)

と。湛然においては法華経の実相、華厳経の法界というのも、涅槃経の仏性というのも、また中論の中道というのも皆同体の異名であって、ただ名の詮するところによって各々その義を異にしているのみである。法界といい実相というのはこれ共に直接に絶対の理を示したものであり、中道とはわれわれの偏情に対して非有非空・空有双照の絶対平等の理を示したものであり、仏性というのは衆生に本具する理であって、これわれわれの迷情に対して迷悟・因果の差別なき平等の義を示したものである。この平等普遍の理に迷ふとき迷悟・因果・彼此の差別を生ずるのである。この平等普遍の理を天台大師は「一色一香無非中道」といはれたのである。今輔行の十義もこのことを説かれたものに外ならない。

その第一義は三身の仏性を有情・非情に亘って遍く具することを説き、第二義は三身は各別でなく三身相即一体であることを説き、第三の事理に約するときは、現象界に従うときは情・非情を分つけれども、実在界においては情・非情の別はない。この故に有情に三身一体の仏性を具するならば、当然非情にもその仏性を具足していることを示されたものである。第四義以下も大体この要領で無情仏性の義を説かれているのである。今輔行に「世人咸ク謂ツテ以テ無情ト為ス」とある「世人」は一体誰を指すかというに、多くの人は華厳家第四祖清涼寺の澄観であるといっているけれども、これには異議があって必ずしも澄観でなく、総じて華厳宗・法相宗の人師を指していると思ってよいであろう。華厳宗では真如が随縁して有情の辺にあるのが仏性であり、無情の辺にあるのが法性であって、仏性には覚

知の能力があるが、法性は不覚であって覚知の能力がないというし、法相宗では有情は理仏性の上に更に行仏性を備へているが、無情は理仏性のみを具して行仏性なしと主張するからである。これらの人師に対して仏性は普遍であって、情・非情、依正二報を択ばずして具足することを示されたものである。これ輔行一における無情有性の義である。

次に金錍論であるが、具さに金剛錍論という。金剛錍、即ち金錍とは涅槃経如来性品に出づる譬喩で、良医が盲人の眼膜を手術するに用うる鋭利なメスのことで、非情仏性の旨を知見すること得ざる盲者の迷見を開抉して非情仏性の義を知見せしめる明者の断を意味するのである。該論は一巻にして始終通じて野客と主人との問答に寄せて無情有性の義を論成したもので、その所破の対象について近年種々の説があるが、今は従来の説に従って正しく清涼澄観、傍らに賢首法蔵を破すとして、華厳宗の思想を破するを目標としたものであることに相違はない。華厳宗の思想を澄観に見るならば、彼は一般に第一義空を仏性と為すというのはただこれ正因仏性の義であって智慧性なき法性のことであり、第一義空を智慧性と為すとき始めて仏性と名けられる。相において有情と非情との別はあっても、性に従うときは情・非情共に仏性があることになるが、この仏性とは遍一切処の意味の第一義空の理にすぎない。しかし有情は正因の上に更に了因の智慧性を有する故に有仏性となし、無情は正因仏性のみにして智慧性なき故に無仏性となすのである（大疏抄）というのである。

この華厳思想に対する荊溪の破析を全錍論に見るならばこうである。

序分に「阿鼻ノ依正ハ全ク極聖ノ自心ニ処シ、毘盧ノ身土ハ凡下ノ一念ヲ逾ヘズ」とあるが、これ天台一家における要文たる十界互具・依正互融の一念三千の義であって、これが該論一部立論の主旨である。

仏性ト云フハ無情ヲ謂フニアラズ、仁（キミ）ナンゾ独リ無情有性ト言フヤ。……

教ニ大小（権実の）ヲ分ツヲ以テ其ノ言碩ニ乖クナリ。若シ無情ト云ハバ即チ応ニ有性ト云フベカラズ。若シ有性ト云ハバ即チ無情ト云フベカラズ。……

衆生正因ノ体遍スト立ツルニ経文モ亦虚空ヲ以テ之ヲ譬フ。

涅槃経に仏性とある仏性とは有情の性を指すものであって無情の性をいうのではないというが、教において教部権実の不同がある。権教は随情方便の教なれば無情の語を存して曾て有性の義を説かないから、若し無情といったならば有性ということはできない。実教は随智真実の教なれば有性なる旨を主張して特に無情ということを云はないから、若し有性といったならば無情ということはできないのである。正因の理体が万法に遍することを涅槃経には「衆生ノ仏性ハ猶ホ虚空ノ如シ、内ニアラズ外ニアラズ、若シハ内、若シハ外ナラバ、云何ンゾ一切処有ト名クルコトヲ得ン」と明している。仏性は虚空の如く一切処に遍するもので、仏性が有情のみに限るとか無情に亘らないというのならば一切処有と名けることはできないのである。正因仏性なる理体が有情・無情を問はず一切処に遍在しているならば正了縁の三因は一体の故に縁・了の二因も有情・無情に本具するのである。故に無情有仏性にして有情のみの成仏ではなく、無情の草木・瓦石等も成仏するのである。

若シ大小ヲ分タバ則チ随縁不変ノ説ハ大教ヨリ出ヅ、木石無心ノ語ハ小宗ヨリ生ゼリ。子ガ小道ニ執シテ大逵ニ抗ハント欲スルハ、其レ猶ホ蟷螂ノ如キカ、何ゾ井蛙ニ殊ナランヤ。故ニ子、応ニ知ルベシ、万法ハ是レ真如、不変ニ由ルガ故ニ、真如ハ是レ万法、随縁ニ由ルガ故ニ。子、無情ニ仏性無シト信ゼバ、豈ニ万法ニ真如ナキニアラズヤ。故ニ万法ノ称、寧ロ繊塵ヲ隔テンヤ、真如ノ体、何ゾ彼我ヲ専ラニセン。

教に於て偏円・権実を分別していうならば、事の随縁・理の不変の説は円教・実教より出でているのである、故に有性というのである。木石無心の語は偏教・権教より生じたものである、故に無情というのである。汝は木石無心・非

情無仏性の権教小道に執して、瓦礫有仏性・仏性体遍の実教大路に抵抗せんとするは宛も蟷螂の如く井蛙に同じき者である。大体万法はこれ真如である、現象界の万法は不変の真如の理体に帰一する故に。また真如はこれ万法である、真如の理体が随縁して万法と現はるる故である。この故に汝が無情に仏性なしと信ずるならば、これ万法に真如を具せずということになるではないか。万法と称うる以上は繊塵を隔てるものでなく、真如の体は彼此を別つものではないのである。これ即ち情・非情の万法を離れて真如が独り存することのないのは恰も波なき水のあることのないのと同じく、真如不変の性を具せざる万法が在ることのないのはなお水に湿はざる波がないが如くである。万法が真如不変の性を具する以上は九界の情・非情と仏界の情・非情とを隔てるものでなく、真如が随縁して万法と現はるる以上は如来の清浄変化と衆生の濁悪生死の差があるの当然である。生仏の迷悟・清濁の別があってもその性は一であって異るものではないのである。

一草一木、一礫一塵、各々一仏性、各々一因果アリテ縁了ヲ具足ス

現象世間に存在する非情たる一草一木も、一礫一塵も本来本有として各々虚空の如き真如の同一仏性を具し、また各々生仏・迷悟・因果不二の同一理体を具している。これが正因仏性である。この正因の所に了因・縁因を具足している。これ正・了・縁の三因一体不三の故である。これが即ち法華経に明す「世間相常住」の法門である。

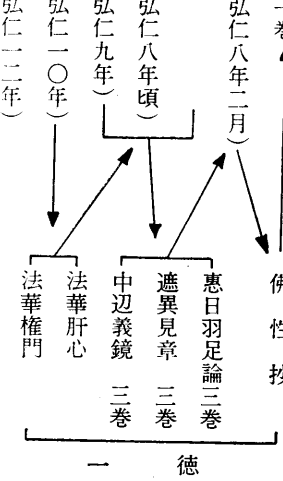
此の如く金錍論は有情・非情を別たず各々同一真如たる仏性を具し、従って非情の草木瓦礫等咸く仏性を備ふるのである、この故に成仏は有情たる衆生のみに限らず、非情たる草木・金石等に亘るのであると説くのである。華厳宗の如き真如が非情の中にある場合をただ法性と名け、有情の中にある場合を方に仏性と名けるのであるというが如きは、これ権教方便の説であって円教真実の説ではないというのである。即ち云く、「仏性ナキノ法性ハ小宗（権教）ニアルベシ、法性ニ即スルノ仏性ヲ方ニ大教（実教）ト曰フナリ」と。しかしこれを更に勘うるとき此の金錍論は古

来草木成仏を説けるものというけれども真の草木成仏ではない。ただ非情の草木瓦石の有仏性（無情仏性）を論ずるのみである。この点ここにおける草木成仏は理具の成仏であって、後世日本におけるが如き発心修行の修得の草木成仏論でないことを断っておく。

二、伝教大師の十界皆成説

日本天台法華宗の宗祖伝教大師（七六七―八二二）の情非情悉皆成仏論は、法相宗の碩学徳一法師との論諍において充分窺うことができる。この大師と徳一との天台・法相両宗教学上の論諍は弘仁八年（一四七七）大師（五一才）が「照権実鏡」を著して徳一の「仏性抄」を破斥したのに始まり、同十二年（一四八一）大師（五五才）「法華秀句」を著して天台法華宗の立場より徳一主張の法相教義を総括的に評破したのに終る五年間であり、大師の撰述するところ実に二十有余巻である。

煩を今避けて徳一との論難往復の状を掲示すれば左の通りである。



（註）徳一の著は何れも現存しない。伝教の一意義集も未見。

徳一法師は解深密経・瑜伽論等を正依とする法相唯識の学匠なれば、一乗方便・三乗真実の旨を主張し、三乗即一乗を明せる法華経は権門なりと説き、彼は法相宗の五性各別説を固執して二乗・闡提は無仏性の衆生にして永く成仏せずと論じた。これに対して伝教大師は諸経中王最為第一の法華経を以て根本正依とし、法華経に依って三乗方便・一乗真実の旨を説き、法華経は決して権門にあらず如来内証究竟の実教なりと主張し、法華の諸法実相・涅槃の悉有仏性の経旨によって十界皆成説を立てゝ三五七九の衆生悉く成仏すべきもの、而も仏性普遍の故に非情の草木・国土までも有仏性なれば必当成仏なりとて徳一の立義を論破したのである。大師の徳一に対する論破書は前掲の通りであるが、その中教学上重要価値を有するものは守護国界章と法華秀句の二書である。今この二書によって仏性論における五性各別説を固執する徳一の所説と悉有仏性説を主張する伝教大師の所説とを管見対照してみよう。徳一によれば仏性に二ある、一は理仏性、二は行仏性である。理仏性は真如自体であって、万法の依止所となるが真如そのものが随縁して万法と現はれることもなく、また真如自体に了照の智徳が具はっているものでもない。ただ真如は万法の所依にとどまるものである。行仏性は仏智であって仏徳生起の根本原因ではあるが、これが一切万有に普遍するものではない。この故に草木・国土等は勿論のこと、有情においても五性の中、菩薩性の者と不定性の者とはこれを備へているが、他の二乗性の者と無性有情（闡提）とはこれを具へていない。故に決定性の二乗と無性の闡提とは如何に修行しても永久に仏果を成ずることは不可能であると主張するのである。大体法相家では法界を真如の実体界と頼耶縁起の現象界との二元的に区別し、真如は凝念常住・不作諸法で常住不変であり不動である故に万法の依止所として一切に亘って普遍ではあるが、万法縁起の原因とはならない、従って真如自体が動いて仏智を生み出すものではない。しからば行仏性は一体何より生ずるか、それは阿頼耶の中の無漏種子より生ずる、万法生起の原因は第八識阿頼耶であって、この阿頼耶は真如とは別の現象界に属するものである。この阿頼耶が万法生起の原因である。されば阿頼耶中の

無漏種子を有する菩薩性の者と三乗種子を有する不定性の者のみが成仏し得るもので、二乗性の者と無性の闡提とは成仏することはできないのである。法華・涅槃に説ける一切衆生悉有仏性とは無漏種子を有する菩薩性の者か、または無漏種子を有する不定三乗性の者であって、五性すべてに通ずるものではないというのが法相家の教義である。

これに対する伝教大師の破斥はこうである。徳一法師の「真如は凝念不変・不作諸法の理体であって、万有を生起すべき原因ではない。現象界の万有を生起開展する原因は阿頼耶という個人我に内在する種子である」という主張に対して、大師は痛烈に弾破されている。大師によれば真如には不変真如と随縁真如との二面があって、不変真如は凝念常住であるというのが法相家の所立であるが、天台宗においてはこの上に更に随縁真如の面を説くのである。随縁真如は縁起常住であって、真如は凝念不動であるばかりでなく、動的なもので常に万有を生成開展しているものである。その現象界の万有を開発縁起するままを実在の常住性とするのが縁起常住である。真如はただ万法の依正所なるにとどまらず万法縁起の原因であって仏果をも成就すべき智種である。これがいわゆる理・行の二仏性一体、正了因の三因不三の仏性である。この仏性たる真如は有情・非情を問はず一切に具有しているのであって、これが法華経の諸法実相であり、涅槃経の一切衆生悉有仏性である。故に三五七九の一切衆生皆成仏であり、草木・国土悉皆成仏である。而して大師は諸経論における五性各別説はこれ真如仏性を実現する上における程度の差であって、衆生の本性の上に法爾本有として絶対的の差別があるのではないと説くのである。即ち法華秀句（伝全三九八）に

当ニ知ルベシ、出世間ノ法ハ真如所縁（真如が縁起せる所縁の境）ノ種子ヨリ生ジテ、彼ノ法爾ノ有為無漏ノ種子ノ所生ニアラザルコトヲ。障・無障ノ差別アルニ由リテ其ノ三乗種性・無涅槃性ヲ建立スルナリ。

といっている。

大体徳一の主張する法相宗の五性各別説は印度の宿命的な種族の差別観を背定せる仏教思想であり、伝教大師の唱

道せる一性成仏説は釈迦仏の四姓制度打破の精神を伝承せる万民平等の人権性を樹立し、而も有情たる衆生も非情たる草木国土も一切を挙げての全体成仏を旨帰とする日本的仏教思想であるというべきである。大師が対徳一の破斥書をもって「守護国界章」と名づけた所以はここに存するのである。

以上要するところ伝教大師の説は正しく法相宗の二乗・闡提不成の五性各別説に対する十界皆成説であって、特に非情の草木成仏を主眼としたものではない。がしかし十界皆成は一切衆生悉有仏性の仏性開発によるものであり、而もその仏性たる真如は天台大師独発の一念三千の理に他ならないものであるから、当然非情草木の成仏の理論ともなるものである。

三、智証大師の草木成仏説

台密家の山王院智証大師円珍（八一四―八九一）には「授決集」二巻に五十四条の法義を規定している中、第五十条が「無情成仏の決」で、ここに無情草木の成仏を出しているが、これには従来の天台宗義を挙げるのみであって、密教の草木成仏論として別に特記すべきものではない。ただ従来の義と異るところは、情非情普遍の仏性たる真如はこれ大日経の「阿字第一の命」、即ち大日の理法身としていることである。それよりも「理智一門集」（仏全四一―五六 日蔵四五―四七〇）の所説の方が具体的で密教的草木成仏論であるといえよう。理智一門集は大日如来の胎蔵・金剛、理智一味門の趣旨より草木成仏を説いたもので、その論旨はこうである。凡そ善悪の諸法も情非情も皆大日如来の一身より出生したもの、一切諸法大日の一身より生ぜざるものはない。而して成仏というはこの大日如来に冥一することを意味するのである。この故に情非情すべて成仏せずということはない。ここを法華経では「是法住法位世間相常住」といい、天台大師は「一色一香無非中道」といはれたのである。即ち法華経の教主は金胎両界の大日如来であって、胎蔵界の大日は

定印の大日であって、ア字（𑖀）を以て種子となし、金剛界の大日は智拳印の大日であって、バン字（𑖪）を以って種子となすものである。情非情すべてこの定慧二門に摂しつくされるものであって、有情は胎蔵界の大日ア字（𑖀）より出生し、非情は金剛界の大日バン字（𑖪）より出生するものである。故に有心無心共に一切が成仏すべきだというのである。ここにいうところの大日如来というのは常在霊山の釈迦如来であって、その実体は法身実相、即ち一念三千の理である。仍て無性有情の成仏も非情草木の成仏も実はこの一念三千の原理に他ならない。ただ智証は顕劣密勝論者であるがため、成仏を論ずるに法華の一心三観の理観によらずして三密加持の事業に代えた点が智証大師の特色である。しかしこれがわが日蓮聖人をして「身は叡山の雲の上に臥すといへども、心は東寺里中の塵にまじる。本師の遺跡を紹継する様にて還って聖人の正義を忽諸し給へり」（下山御消息）と評せしむる所以である。

四、慈慧良源の所説

次に天台一家の教学の発展を畫して論義制度を興立した慈慧大師良源（九一二―九八五）の草木成仏説を挙げておこう。檀那院覚運問・慈慧良源決の「草木発心修行成仏記」（仏全四一一四）に云く

問フ、一家ノ意、草木ニ三因仏性アリトスルヤ。

答フ、有リトスルナリ。

疑フテ云ク、草木ニ於テハ自ラ理仏性アリト雖モ行仏性ハアルベカラズ。豈ニ縁了ノ二因ヲ具シテ成仏センヤ。

答フ、理仏性アルコトヲ許サバ、知ンヌ行仏性モアルベシト。所謂「況法身ノ処ニ身常在ニルヲヤ」（輔行十義の第二）ノ釈、此ノ意ナリ。凡ソ真如ノ妙理ハ其ノ体無相ナリ情・非情ニナラザルナリ。有情ノ中道ニ縁了ノ二因アラバ、草木ノ中道ニモ亦二因アルベキナリ。若シ無シト云ハバ中道二ツナル過ヲ招クベキモノナリ。之ニ依テ金錍論ニ云ク、「一草一

木一礫一塵各一仏性各一因果具ニ足縁了ニ」己上。此ノ文ニ二意アリ。爾前・迹門ノ故ニ縁了ナシ、本門ノ意ハ縁了アルナリ。他人ノ所立ハ爾前・迹門ノ説ニシテ本門ノ意ニアラズ。本門ノ正意トハ迷情ノ事ト悟中ノ事ト合一ノ説ナリ。故ニ彼ノ爾前ノ迷情ノ事ニ於テ専ラ発心修行ノ義ヲ許ス。是ノ故ニ本門合一ノ説ハ迷情ノ事、本来発心修行ノ体ナリ。他人本門ノ意ヲ知ラズ、故ニ発心修行ノ義ヲ立テザルナリ。

と。この草木成仏記は単に荊溪の義を祖述したものに過ぎず、無情仏性・草木成仏の義において何等の発展をも見ることができない。荊溪・伝教の義はただ草木成仏といって理性の成仏義を論じたのに対し、この慈慧に於てはその題号に「草木発心修行成仏」といったところに、非情草木の理性の成仏でなく事相の発心修行による成仏の意を説き出しているのが、わづか日本的な発展であるといへるが、論旨を検すればやはり草木も三因仏性を具する故に事相に発心修行すべき存在なりという理性論にすぎず。発心修行による成仏の具体性のないのが全く寂寥に堪へない。これはやがてわが日蓮聖人の草木成仏論を俟たなければならないところである。

五、東陽房忠尋の所懐

次に慧心流中古の名匠、東陽房忠尋（一〇六八―一一三八）の草木成仏に対する所懐を出せば、「漢光類聚」第一巻（仏全本一九）に

決附ニ云ク、草木成仏ニ七重ノ不同アリ。一ニハ諸仏ノ観見、二ニハ法性ノ理ヲ具ス、三ニハ依正不二、四ニハ当体自性、五ニハ本具ノ三身、六ニハ法性不思議、七ニハ中道ヲ具スルナリ。……

一ニ観見ノ草木成仏トハ経（中陰経）ニ云ク、「一仏成道観ニ見法界ニ草木国土悉皆成仏」ト。草木ノ正体ハ正シク成仏セズ、諸仏、草木ヲ境ト為シテ観法ヲ作ス時ハ能縁ノ見分ニ引カレラ所縁ノ草木ノ相即チ仏体ト成ル、故ニ且ク草木成仏ト云フナリ。

二ニ理具ノ草木成仏トハ草木モ法性ノ理ヲ具ス、……草木所具ノ法性ノ理ヲ即チ成仏ト名クルナリ。
三ニ依正不二ノ草木成仏トハ法華一実ノ意ハ依報・正報全ク各別ナラズ、円融相即シテ一体ナリ。……
釈迦如来既ニ成仏ス、是レ草木ノ成仏ナリ。……
四ニ自性ノ草木成仏トハ法々塵々ノ自体、当体ノ仏ナリ。……草木成仏ト云テ別シテ三十二相等ヲ具スベカラズ、草木ノ根茎枝葉ノ当体己々本分ナル是レ成仏ノ義ナリ。
五ニ本具三身ノ当体自性不思議ナルハ法身ナリ。迷者ノ情見ニハ草木ニ三身ナシト思ヘリ。法華値遇ノ円頓ノ行者ニハ法々塵々ノ当体、自性不思議ナルハ法身ナリ。照了ノ徳アルハ報身ナリ。色相具足等ハ応身ナリ。……円頓行者ノ知見ニハ一切諸法無作三身ナルガ故ナリ。
六ニ不思議ノ草木成仏トハ草木ノ自性、不思議ニシテ更ニ事理ノ相ヲ絶ス。不思議ノ本性ナルヲ強テ成仏ト名ク。
七ニ一念三千ノ成仏トハタダ心是一切法・一切法是心ナルガ故ニ、草木ニ三千ヲ具シ衆生ニ三千ヲ具ス。行者ノ一心、草木ナルガ故ニ草木ヲ縁ズ、草木、三千ヲ具スルガ故ニ或ハ能縁ト成リ或ハ所縁ト成ル。若シ草木ニ三千ヲ具セズンバ、是ノ如ク草木、三千ヲ具ストモ（草木成仏すとの意か）思フベカラズ。……草木、本ヨリ三千ヲ具ス、法性常寂ハ一念、法性常照ハ三千ナリ。既ニ常照ノ二相ヲ具ス。是ヲ草木成仏ト名ク。

とあり。以上忠尋は種々の観点よりして七種の草木成仏を立つるも結局は四種となる。第二の理具と第五の本具の三千と第七の一念三千とはこれ同一義であり、第四の当体自性と第六の不思議とは同一義であるから、詮ずるところ一に諸仏観見の草木成仏、二に理具の草木成仏、三に依正不二の草木成仏、四に当体自性の草木成仏の四種である。而して同書（同上二一）に

尋ネテ云ク、草木・衆生倶ニ三千ヲ具スト云ハバ、如何ンガ草木・衆生ノ別ヲ分ツベキヤ。

答フ、尤モ口伝スベキ法門ナリ。心ニ三種アリ、謂ク矣栗陀(イリダ)(物質に宿る精要心)・干栗陀(カリダ)(非情草木の心)・質多心(衆生の慮知心)ナリ。矣栗陀・干栗陀ハ倶ニ草木ノ心ナリ。草木、四季ノ時節ヲ知テ枝葉生長スルハ矣栗陀心ナリ。衆生ハ質多心ヲ面トナシ矣栗陀・干栗陀ヲ裏トナス。草木ハ矣栗陀(イリダ)・干栗陀(カリダ)ヲ面トナシ質多心ヲ裏トナス。……草木ハ質多心ヲ隠シテ現在前セザル故ニ非情ト名ク。三千具足ノ条ハ更ニ疑ナキコトナリ。

とあり。衆生と草木、有情と非情との別を知るべきである。

六、宝地房証真の見解

台家の草木成仏論として最後に慧檀兼学の中古の明匠にして天台一家註釈中の第一人者たる宝地房証真(一二〇七頃寂)の草木成仏に関する見解を紹介しよう。彼が著たる摩訶止観私記第一本(仏全本 七九八 天台全、止一一九七)に

無情仏性トハ具サニ金錍論ニ説クガ如シ。

問フ、草木ニ仏性有リ、有情ノ如ク発心修行シテ成仏ヲ得ルヤ不ヤ。若シ成仏セバ応ニ始起ノ有情アルベシ。若シ成仏セザレバ既ニ仏性有リ、豈ニ顕発セザランヤ。

或ル古徳ノ云ク、草木、発心修行シテ成仏スト。近代ノ先徳、此ノ義ヲ許サズ。

とて、草木成仏論について、或る古徳は草木は発心修行して成仏をなすとし、近代の先徳は草木には発心修行の成仏はないといっている。或る古徳・近代の先徳とは一体誰人を指すや知る由もないが、彼はこの草木の発心修行の成仏を認めない理由として、一に文理を明し、二に外難を遮すの二義を以て示されている。これを全部ここに挙げることは煩しいから、今その初のみを出しておこう。

初ニ文理ヲ云ハバ、一代ノ経説・一宗ノ教文ニ都テ成仏ノ説ナシ。輔行ノ十義、金錍ノ一論タダ非情有仏性ノ義ヲ明シテ、草木発修ノ成仏ヲ論セズ。若シ非情変ジテ有情ト作テ成仏スト云ハバ、始起ノ有情ハ化他部ニ同ジ、無因有果ハ外道ノ説ニ同ジ。生死ノ初メアルハ数論ノ義ニ同ジ。是一

又諸ノ草木並ニ皆朽滅ス、現在ニ変ジテ有情ト成ルベカラズ。亦惑業ナシ、既ニ因果ヲ離ル。滅シテ後有情ノ身ヲ受クベカラズ。是二

又諸ノ草木ハ有情ノ業感ズ、何ノ因縁ニ由テ転ジテ有情ト成ランヤ。豈ニ他業ニ由テ更ニ他身アラン。亦是レ一人分テ多人トナランヤ。是三

これより下に七義、即ち全十義を以て草木の発心修行の義を難じているが、第四以下の七義はこれを略する。

次ニ外難ヲ遮セバ、問フ、中陰経ニ云ク「一仏成道観ニ見法界一草木国土悉皆成仏、身長丈六光明遍照、其仏皆名ニ妙覚如来一」已上。答フ、仏眼ノ照ス所ハ一色一香モ遮那ニアラザルコトナシ、故ニ成仏ト云フ、始成ニアラザルナリ。若シ彼ノ経ノ如クンバ一切ノ依正皆己ニ成仏ス、唯仏界ニアリ。故ニ知ンヌ、聖ニ望ムレバ皆聖、凡ニ望ムレバ皆凡ナリ。金錍論ニ云ク「迷悟雖殊　事理体一。故一仏成道法界無レ非ニ此仏依正一、一仏既爾諸仏咸然。衆生自於ニ仏依正中一而生ニ殊見一。苦楽昇沈一一皆計為ニ己身土一。浄穢宛然成壊斯在」云云。……問フ、宝積経ニ云ク「一切草木樹林無心可下作ニ如来一身相具足上」。答フ彼ニ明サク文殊変ニ舎利弗一令レ成ニ仏身一説法竟方説ニ此言一」ト。故ニ発心ノ義ニアラザルナリ。

といい、これに続いて

草木成仏ニ且ク四義アリ。一ニハ理性ハ本来是レ仏ナルニ依ル。二ニハ仏眼ノ照見ニ依テ仏ト為ス。三ニハ遮那ノ遍一切処ニ依ル。四ニハ諸仏変ジテ作仏セシムルニ依ル。

といって、草木成仏に四義あることを明し畢て

此ノ義アリト雖モ若シ事ヲ以テ実ヲ論ゼバ仏ト作ラズ。例セバ有情ニ亦四義アレドモ而モ事ニ望メテ論ズレバタダ是レ凡夫ナルガ如シ。

という。此の下委細に草木成仏の問題について説いているが、結局宝地房の説は近世の碩学慧澄和尚のいうが如く、草木の成仏は有情の成仏に依随する依他心の成仏であって、草木に事心あって自ら発心修行して成仏するという草木独立の成仏ではない。慧澄和尚が

私記一ノ本廿五ニ云ク、若シ理ニ約シテ説ケバ本来是レ仏ナリ。若シ証見ニ約セバ有情成仏スル時万法皆成仏スト。是レ宝地ノ意ハ理性ニ約スレバ草木自ラ成仏シ、修用ニ約スレバ草木ハ有情ニ随テ作仏スト謂フニアリ。（三大部講義中止観講義一）

といはれた如く、言葉として草木の発心修行の成仏でなければならないといっても、それは結局は理性の成仏か、或は有情随依の成仏かであって、草木自身の修得頭了の事相成仏ではない。これは徹頭徹尾、理具三千を旨として未だ事具三千の義を論明せざる天台宗の立場としては至極当然のことで、これ以上超ゆることはできないのである。

法華宗の説

一、宗祖日蓮大士の草木成仏と木絵二像の意神とについての説

法華宗宗祖日蓮大士（一二二二―一二八二）の御書によって草木成仏の法門を論ぜんとするならば、これについて佐渡以前と佐渡以後との区別を立てなければならない。何となれば草木成仏の基本原理なる一念三千義において前後両者の相違

がある故である。佐前における草木成仏論の基本的教理は台家附順の理具一念三千義であり、佐渡におけるそれは宗祖別頭の事具一念三千義である。草木成仏に関する十有余の御書中このことを判然と区別して説き顕されている御書はなんといっても、序論において既に的示した観心本尊抄の御文である。この御文の初に示せる分即ち第九・十・十一の三問答は迹門理具一念三千の法性による天台家所談の草木成仏論であり、後の第十九問答の答釈なる無量義経以下の分は本門事具一念三千の法体による草木成仏である。なお本尊抄の究竟旨帰よりいへば理具・事具の性徳の成仏よりも草木自らの発心修行の下種を以て宗祖の本懐としなければならない。

今佐後真実の意を以て佐前の御書をも開迹顕本して宗祖大士所懐の草木成仏論を示せば左記の通りである。

(一) 草木成仏の原理

本門法華経の立場より法界の依正万法を観るとき、「法界は釈迦如来の御身にあらずといふことなし」(七四六)で有情はいうに及ばず非情たる日月・国土・草木等われら対象の客観世界はすべて、本来事具三千を具足している本有の仏体であり、久遠成道の本仏釈尊の分身の舎利である。戒体即身成仏義(四一)に云く

法華の覚を得る時、我等が色心生滅の身即ち不生不滅なり。国土も爾の如し。此の国土の牛馬六畜(馬・牛・羊・豚・犬・鶏)も皆仏なり。草木・日月も皆聖衆なり。経に云く、是法住法位世間相常住文。……法華経の悟りと申すは、此の国土と我等が身と釈迦如来の御舎利と一つと知るなり。経に云く、観三三千大千世界一乃至無レ有レ如二芥子一許非是菩薩捨二身命一処文。此の三千大千世界は皆釈迦如来の菩薩にておはしましけるときの御舎利なり。我等も此の世界の五味(辛・酸・甘・苦・鹹)をなめて設けたる身なれば、又我等も釈迦如来の舎利なり。故に経に云く、今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子等云云。

と。勿論この戒体即身成仏義は開宗十二年前宗祖二十一才蓮長時代の著で、この書は一に小乗、二に権大乗、三に法

華、四に真言と次第して真言を以て最勝とせるものである。この故にこれを開迹顕本して本門の意を以て解さなければならない。この文の有情たる衆生と非情たる草木・国土・日月等一切は釈迦如来の菩薩でおはますときの捨身命処であるという意を、本門の見地を以て解するならば、釈迦如来は勿論始成の釈迦ではなく久遠成道本果の釈尊であり、その本因の釈迦菩薩は実は本化四菩薩である。してみれば情非情、依正万法われら客観世界の一切は皆悉く本地は四菩薩であって、それらは何れも本化四菩薩の捨身命処の顕現でなければならない。されば宗祖は本化四菩薩の徳用を生死一大事血脈抄(七四四)に挙げて

火は焼き照すを以て行と為し(一名上行の徳)、水は垢穢を浄むるを以て行と為し(三名浄行の徳)、風は塵埃を払ふを以て行と為し、又人畜草木の為に魂となるを以て行と為し(二名無辺行の徳)、大地は草木を生ずるを以て行と為し(四名安立行の徳)、天は潤すを以て行と為す(釈迦・多宝の仏徳)。妙法蓮華経の五字も又その如し。本化地涌の利益是れなり。

といはれている。法界の依正万法はもともと功徳の総体たる妙法蓮華経の体内にあり、この妙法蓮華経体内の功徳が本仏たる釈迦・多宝の境智二仏とあらはれ、釈迦・多宝の仏徳は更に開出して本化四菩薩の徳用とあらはれ、終に十法界の依正万法と開展して各々その所与の修用によって活動しているのである。この故に本門事具三千の教理よりすれば非情たる草木・国土は本来既に本仏如来であり、本化菩薩である。

(註)

南無妙法蓮華経(功徳聚)→
- 釈迦(智徳)
- 多宝(境徳)
- 空大→
  - 上　行(向上力)—火大
  - 無辺行(拡大力)—風大
  - 浄　行(浄化力)—水大
  - 安立行(生長力)—地大

仍て本来仏体たるべき草木を以て刻彫図造せる木絵二像はいうまでもなく、無始本有の如来、生ける教主釈尊である。真間釈迦仏供養抄（六三三）の左記の文をこの意を以て拝すべきである。

釈迦仏御造立の御事、無始曠劫よりいまだ顕れましまさぬ己心の一念三千の仏、造り顕しますか。はせまいりてをがみまいらせ候はばや。欲令衆生開仏知見（仏界を具せる九界）乃至 然我実成仏已来（九界を具せる仏界）は是れなり。但し仏の御開眼の事はいそぎ伊予房もて果しまいらせ給ひ候へ。

かくの如く本門事具一念三千論の上よりいえば、有情たる衆生成仏も非情たる草木成仏も同一原理の成仏である。宗祖は

一念三千の法門と申すは三種世間よりをこれり。……第三の国土世間と申すは草木世間なり。……此の法門は衆生にて申せば即身成仏といはれ、畫木にて申せば草木成仏と申すなり。（開眼養供抄 一四四五）

と仰せられたのはこの所以である。

以上草木成仏の義は既述の序論第三の「草木成仏と木画本尊についての本尊抄の文」の項と照合して理解されたい。

(三) 草木の下種成仏

以上の本門事具三千義による草木成仏はこれ宗祖の本懐本門究竟の成仏ということはできない。何となればこの草木成仏は能生能現の本仏の辺よりすればこれ修徳の下種成仏と見られるが、所生所現の草木自身の面より論ずるならばやはりこれ性徳の成仏であって、草木自身の発心修行による修徳の下種成仏ではない。本尊抄第十九問答の答釈における「雖レ然所レ詮非二一念三千仏種一者有情成仏、木画二像之本尊有名無実也」という文は、これ迹門理具一念三千の純性徳の成仏を超えた本門事具一念三千の修徳下種の情・非情の成仏をあらはせるものであるけれども、これは

本仏の久遠劫の捨身命処による下種であって、衆生自身の発心修行による修徳の下種ではない。この故に本尊抄では第二十問答の答釈に至って

雖レ爾文心者釈尊因行果徳二法妙法蓮華経五字具足。我等受二持此五字一自然譲二与彼因果功徳一

といはれたのである。妙法蓮華経は総名にしてよく本仏釈尊の久遠劫の修行によって得たる因行果徳の二法を総持せる要法である。この故に本尊抄の結文に示せる如く、事具一念三千の法体を証得することを得ざる末代の幼稚たる衆生も草木も共に、一念三千の法体、本仏の因行果徳の二法を能具し総在せる妙法蓮華経を聞信修行して始めて成仏が可能となるのである。開目抄(八一九 主八七)に

但天台(天台内鑑の本門)の一念三千こそ仏になる道とみゆれ。此の一念三千(本門事具一念三千)も我等一分の慧解もなし。而れども一代経々の中には此経(本地法華経)計り一念三千の玉をいだけり。……此経は愚人も仏因を種ゆづし。不レ求二解脱一解脱自至等云云。

というは此の意である。

しからば有情たる衆生の聞法発心・信心口唱は理解できるが、草木に果して慮知心があって聞法信心することができるか。一般の常識では草木には慮知心なく無知無覚であって発心修行すべきだとは考えられない。しかし法華経の真意よりいえば一切有心であって常不軽菩薩の礼拝の対象は正報たる衆生ばかりでなく山川・草木にも亘るべきものである。まして宗祖の成仏論は有情たる衆生のみの成仏に限らず草木・国土をも摂しての全体的成仏である。宗祖は「松栄ゆれば柏悦ぶ、芝枯るれば蘭泣く、情なき草木すら友の喜び友の歎き一つなり」(二〇六五)といはれている。非情の草木に智・情・意の存するを認められていることは有情と同様である。この故に草木にも有情の如く慮知心あって聞法発心・信心修行して妙法蓮華経の大法を下種し性徳本有の事具三千の仏種を開発成仏すべしとするのが宗祖

の草木成仏論である。この草木成仏についての具体的説明や現証は遺文中に見ることができないが、草木成仏の下種成仏論はかくの如きであって、これが宗祖の本懐であり観心本尊抄の終窮旨帰である。

（註）宗祖の御書中に波木井殿御書（二一一三）に、吹く風、ゆるぐ木草、流るる水の妙法口唱の旨を説き、無作三身口伝抄（読一九）に草木成仏の具体的事例を挙げているが、今これらを疑筆・偽筆として取上げない。ただ上野尼御前御返事（二〇七五）に「法華経と申すは、手に取れば其の手がやがて仏と成り、口に唱ふれば其の口即ち仏なり。……経に云く、若有聞法者無一不成仏云云」とある文は、草木非情の成仏をわれらが一身の上において論じたものと見ることができる。われら人間の心神は有情であり、身体は非情である。有情の心神が非情の肉体を生み出し、非情の身体に心神を宿し色心一如しているのが衆生である。故にわれらが妙法蓮華経を受持口唱すれば、身心同俱の成仏であって、手足・髪爪等すべて悉く仏徳を現じ相好を具足するというのである。これがまことの身心一具の即身成仏である。

㈢ 木絵二像開眼の教法

以上の本門事具一念三千の義によるに草木泥土を以て作成された木像絵像は単なる偶像ではなく、これらは皆本来仏体であるばかりでなく、本地は本化の四菩薩として久遠劫の間妙法蓮華経の大法を聞信修行している尊形であると拝さなければならない。提婆品の「我見レ上レバ釈迦如来一於二無量劫一難行苦行積レ功累レ徳求二菩薩道一未二曾止息一」と説かれているのはこの意をあらはしているものである。この故に木絵二像の開眼供養には法華経、即ち草木の仏種子たる事具三千を説き顕す本門法華経、殊に草木の発心修行の下種成仏を明す八品所顕の本地の妙法蓮華経を以てしなければならないのである。

開眼供養抄（一四四四）には

御日記の中に釈迦仏の木像一躰云。開眼の事、普賢経に云く、此大乗経典諸仏宝蔵、十方三世諸仏眼目等云。又云く、此方等経是諸仏眼、諸仏因レ是得レ具二五眼一云。……三身の事、普賢経に云く、仏三種身従二方等一生是大法

印（ニンテス）印（ヲ）涅槃海（ニ）、如（キ）此海中能生（ヨリクズ）三種仏清浄身（ノヲ）、此三種身人（ノハ）天福田（ニシテ）応供中最（ノノナリ）弐（ニ）。……この五眼三身の法門は法華経より外には全く候はず。……されば画像木像の仏の開眼供養は法華経、天台宗にかぎるべし。其の上一念三千の法門と申すは三種の世間よりをこれり。……第三の国土世間と申すは草木世間なり。草木世間と申すは五色のゑのぐ（絵具）は草木なり。画像これより起る。木と申すは木像是より出来す。此の画木に魂魄と申す神（たましひ）を入るる事は法華経の力なり。天台大師のさとりなり。此の法門は衆生にて申せば即身成仏といはれ、画木にて申せば草木成仏と申すなり。止観明静前代未聞と説かれて候と、無情仏性感耳驚心等とのべられて候は是なり。此の法門は前代になき上、後代にも又あるべからず。設ひ出来せば此の法門を偷盗せるなるべし。然るに天台以後二百余年の後、善無畏・金剛智・不空等、大日経に真言宗と申す宗をかまへて、仏説の大日経等にはなかりしを、法華経・天台の釈を盗入れて真言宗の肝心とし、しかも事を天竺によせて漢土・日本の末学を誑惑せしかば皆人此の事を知らず、一同に信伏して今に五百余年なり。……此の仏こそ生身の仏にてはおはしまし候へ。

といはれている。この文は観心本尊抄の第十九問答の答釈と同じく普賢経の文を引いて法華経を以て開眼供養すべき旨を明されたのである。ところが本尊抄の答釈は天台所談の迹門理具一念三千を説き畢って、宗祖内証の十界互具・境智冥合の本門事具一念三千を以て木絵本尊の意神となすべきことを明されたのに対して、今文は「画像・木像の仏の開眼供養は法華経、天台宗にかぎるべし」とか、「此の画木に魂魄と申す神（たましひ）を入るる事は法華経の力なり。天台大師のさとりなり」とか、また「止観明静前代未聞と説かれて候と、無情仏性感耳驚心等とのべられて候は是なり」とか述べて、天台の立場を堅持されている。今の開眼供養抄は「建治二年丙子七月十五日」付のものであるから、当然宗祖の内心は本門の立場でなければならない。何故天台の立場をとっていられるかといへばこうである。これは今文中に真言宗の盗法を挙げてこれを破斥されているように、宗祖当時真言宗が盛んに草木成仏の法門を自家独特の教義

の如く宣伝し、木絵本尊の開眼を専行していたものと見えて、宗祖は真言宗喧伝の草木成仏の法門並に木画本尊の開眼は、もともと天台の一念三千より起ったもので真言宗に全然ないもの、それを真言宗が天台独自の法門を盗み取ったものであるから、木画本尊の開眼供養は真言宗にさせては無益である、これは必ず天台宗により法華経を以てしなければならないと主張せられた。即ち権宗たる真言を破して実宗たる天台を立てられた権実相対の説である。法華骨目抄（五二八）にも「今の木絵二像を真言師を以て之を供養すれば実仏にあらず権仏なり。権仏にもあらず、形は仏に似れども意は本の非情の草木なり。又本の非情の草木にあらず魔なり鬼なり。真言師が邪義、印・真言となって木絵二像の意となれる故に。……法華を心得たる人、木絵二像を開眼供養せざれば家に主のなきに盗人が入り、人の死するに其の身に鬼神入るが如し」とあるを拝すれば、当時の真言の草木成仏・木絵開眼を自家の独専なる如く喧伝した る実状知るべきである。

以上の如き理由によって今の開眼供養抄の文が迹門天台宗を表面に立てられたのであって、その非情の草木・木絵本尊の意神たる一念三千においては、当然本尊抄に既に開説せる本門事具一念三千の義と解さなければならない。従って今文に示せる木絵二像の開眼供養には、一念三千の仏種を詮顕せる本地法華経によらなければならないことはいうまでもない。文中の「法華経」とあるのは本地法華経、「天台宗」とあるのは内鑑本門の天台と解すべきが佐後の御書として至当である。佐前の真間釈迦仏供養抄（六三三）の

法華経一部を御仏の御六根に読み入れまいらせて、生身の教主釈尊になしまいらせ、かへりて迎ひまいらせさせ給へ

という文もまた本尊抄の意を以て本地法華経による開眼供養と解すべきである。

二、日隆聖人の草木成仏に対する所釈

法華宗再興唱導師日隆聖人（一三八五―一四六四）の草木成仏論は本門弘経抄中に散見するところであるが、これらは何れも要説であって、これが詳細は開迹顕本宗要集雑部中の草木成仏の算の下に論ぜられている。今弘経抄の所説を参照して宗要雑部の所述を紹介することにしよう。

(一) 当宗の草木成仏の教理的根拠

日隆聖人は先づ草木成仏の教理的根拠を挙げて

問ふ、何れの教理によって草木成仏の義を立つるや

答ふ、総じては爾前・迹・本・涅槃の諸部の円に明すと雖も、別しては本門に限る。理は通ずと雖も、別しては天台内鑑本理三千の色香中道の理に依るなり。

とて、本宗の草木成仏の義を立つる教理的根拠を宗祖日蓮大士の内証妙解に随って天台内鑑の本理の三千、即ち本因本果本国土依正互融の事具一念三千の理によることを前提として草木成仏義を立論するのである。これによって次に所以に本化円宗の所談は顕本事円の十界界如の事三千を談ずる故に、本国土妙の上の非情の草木成仏何の疑かあらんや。爰を以て解釈の中に「此妙法蓮華経者本地甚深之奥蔵也。文云是法不可示世間相常住」（玄義本序）文。既に世間相常住と云ふ、豈に草木成仏の義にあらずや

といはれている。草木成仏の教義はあくまでも非情の国土世間に属する問題であって、本門の意においては本国土たる事相世間の上に論ずべきもので、隆師が「此妙法蓮華経者乃至世間相常住」の文を引用的示された所以である。この故に草木成仏の原理というのは本門所詮の体たる本因果国依正互融の事具三千であるとし、その能詮の教は本門八

品所顕の本地甚深の奥蔵たる久遠下種の妙法蓮華経であるとするのである。

(二) 爾前・迹門の草木成仏論を評破す

日隆聖人は草木成仏について論ずるのに、爾前・迹門・本門の三重に経てこれを説き、その破立勝劣を立てられている。当門流の意をもって爾前・迹門の草木成仏論に対しては当分・跨節の二意を立て、爾前・迹門においては当分の意をもってすれば彼の両部にも草木成仏の義を談ずるけれども、本門跨節の立場をもってすれば彼等には真の草木成仏の義は許すことはできないと論破せられている。

1、爾前諸経の草木成仏論を評破す

先づ当分の意をもって爾前諸経を見れば、所詮の理として蔵通等の四教を説き四教の中の円教においては草木成仏を明している。即ち中陰経に

一仏成道(シテ)観(ズレバ)見法界(ヲ)草木国土悉皆成道(ス)。身長丈六(ニシテ)光明遍照(ナリ)。其仏皆名(ク)妙覚如来(ト)

といい、宝積経には

一切草木樹林無心(ニシテ)可(キ)作(チ)如来(ト)身相具足(ス)

といい、また涅槃経には「一切衆生悉有仏性」の旨を明して、情・非情一切成仏すべしと説いているのはこれである。

然るに本門跨節の立場よりこれを見れば、草木成仏というのは十界互具依正互融の事具三千によらなければ成立しないもの、従って迹門所詮の理具三千さえ明していない爾前諸経に非情たる草木の成仏は断じて成立しないのである。爾前に既に円理を明しているというがそれは実は未開の理であって、未だ果頭開顕の人開会を明さない法開会の但理三諦の円であり、また爾前は仏慧に約して依正不二の旨を論じているが、未だ一念三千を明さない故に依正隔別

の別門に摂せられるのである。かくの如く爾前諸教はただ仏慧に約し法開会に約して草木成仏を論ずるもので、本門の立場よりこれを観れば有名無実の成仏である。

この爾前諸経の所説を天台宗では依他心の草木成仏というのである。蓋しこれ非情草木自身の成仏ではなく、有情たる衆生が成仏するとき、非情の草木・国土も有情の成仏に随依して成仏するというものである。中陰経の文の如く衆生が仏と成り己てこの仏の照見によって始めて草木・国土が仏たり得るものである。而して爾前諸経には未だ三身俱常を明さず、法身常住・報応無常と説く故に、たまたま草木成仏すというも法身如来に約する本有理性の成仏であって、未だ発心修行の道程を経たる修得顕成の成果ではない。例へば彼の大日経には

我即同二心位一一切処自性。普遍三於種々有情及非情一。阿字第一命。……既云下諸法以三阿字一為也命。命者即是発三菩提心一也

といっている。阿字第一の命は法身実相そのものであって未だ報命を具足していないもの、この阿字が一切処に遍する故に情・非情皆遮那の体である。この理に由るが故に発心すというけれども、木石等は此の法身の理を具するも無心である。無心なるが故に発心することはできない。この文はただ理遍を明すのみに過ぎない。これが密教所説の草木成仏であって草木自らの発心修行の成仏ではない。

2、法華迹門の草木成仏論を評破す

次に法華経迹門当分の意を明さば、今経迹門においては人法共に開顕して諸乗即一仏乗と会し、一念三千を説いて十如是の因果・依正互融を談ずる故に、十界の情・非情の万法悉く正了縁の三因仏性を具して皆悉く成仏すべきである。故に非情の草木・国土までも成仏すべきはいうまでもない。されば経には「諸法実相」といい、「世間相常住」と明している。諸法といい世間相というは俗諦の十界依正の森羅万象である。妙楽大師は「実相ハ必ズ諸法、諸法ハ

必ズ十如、十如ハ必ズ十界、十界ハ必ズ身土」（金錍論）と判じている。十界の諸法は因果互具し依正互融しているのである。金錍論の序段に「阿鼻ノ依正ハ全ク極聖ノ自心ニ処シ、毘盧ノ身土ハ凡下ノ一念ヲ逾ヘズ」というのは是れである。三千の理体が因にあっては正了縁の三因仏性であり、果に至っては法報応の三身如来である。この故に非情の草木国土も理性に三因仏性を具し、三身如来の功徳を備へて必ず仏果を成就し仏徳を顕備すべきであるという。ここを止観の一（和本一六ヲ）には「一色一香無レ非中道ニ」といい、輔行の一（和本一上六四ウ）には「世人咸謂（ナヲク）中略無情仏性惑耳驚心（ス）」と標して、十義をもって無情有仏性の義を談じて草木成仏の旨を顕し、また金錍論一巻の始末、就中四十六重の問答は皆非情無仏性の義を破して、非情有仏性の義を立て草木成仏を論証せるものである。

しかし本門跨節の立場よりこれを顧れば、迹門の理具三千は十界互具すといへども、第十の仏界すでに果頭未開にして始覚無常の土民であり、また依正互融すといへども陰生土三世間中の国土世間未開無常の故に、名は一念三千であるが義においては真の一念三千ではない。宗祖が十章抄（六七五）に

一念三千と申す事は迹門にすらなを許されず、何に況や爾前に分絶えたる事なり。一念三千の出処は略開三の十如実相なれども義分は本門に限る。爾前は迹門の依義判文、迹門は本門の依義判文なり。但真実の依文判義は本門に限る

というの是れである。

また迹門の成仏は理性法身に約する成仏であって、法身常住・報応無常なる故に、これ所依常の草木成仏である。かくの如き迹門の草木成仏を天台宗では共依心の草木成仏というのである。蓋しこれ情非情不二・依正互融の故に、有情の衆生成仏は非情の成仏に依らなければならないし、非情の草木成仏は有情の成仏に依らなければ成立しないもの、有情・非情共に依正互具の一念三千に由る成仏であるから、情非情いづれもそれ自身独立の成仏をなし得ら

れないのである。これまた理具三千に由るが故に発心修行の修得成仏でなく理性本有の性徳成仏たる所以である。ここを以て開目抄(七六五 主二五)に

しかりといへどもいまだ発迹顕本ぜざれば、まことの一念三千もあらはれず、二乗作仏も定まらず、水中の月をみるがごとく、根なし草の波の上に浮べるにたり

といはれたのである。

(三) 木門所談の草木成仏義

本門の意は開迹顕本の義をもってその命とする故に、迹門所詮の理具三千の実相を開して本因本果本国土依正互融の事具三千の妙法を顕すのである。これを滅後流通の辺よりいへばとりもなをさず天台外宜の迹理三千の止観を開して、天台内鑑密本の事具三千の止観を顕す意である。開目抄(七六五 主二六)の「九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備はりて、真の十界互具・百界千如・一念三千なるべし」の文、及び本尊抄(九三九 主一〇八)の「今本時ノ娑婆世界ハ乃至此レ即チ己心ノ三千具足・三種ノ世間ナリ」の文は、この事具三千を釈成するもである。

さて本門における草木成仏はこの事具三千の法体、即ち本因本果の十界互具、本因本果本国土の依正互融の事円実相を基本として論ずるものである。事具三千の法体とは本仏釈尊が久遠成道の本時に法界三千の理法を我が己心に証得して証法とし、これを更に法界の万法として事現荘厳して事法とせられたものである。この消息を解明せんとせられたのが本尊抄(九三七 主一〇四)所引の「譬如国王」等の無量義経の文であり、また同抄(九三九 主一〇七)引用の「当レ知身土一念三千故成道時称二此本理一一身一念遍二於法界一」の輔行五(和本五中 一二ヲ)の文である。されば法界の森羅万象、情非情を問はず一法として本仏釈尊の色心の顕現であり事相荘厳の生身舎利にあらざるものはない。このことを説示したものが既に出せる提婆品の「観三千大千世界」[三六]の文である。本門弘経抄四三(隆全五 一二五)には以上の趣旨を至極巧妙に而も平

易に解説されている。即ち云く

伝に云く、妙法蓮華経は一念三千なり。三千とは陰生土依正互具の体なり。……此の時は此の三千大千世界の依正二報、皆悉く釈尊・上行の色心なり。是れ妙法蓮華経なり。此の三千、事に周遍して互に九界を益し、互に母となり父となり、衣食・財宝となって衆生を益す。是れ最上の仏恩なり。

其の証如何、答ふ、今の「世尊大恩 以二希有事一憐愍教化利二益我等一」等は是れなり。……本門寿量品の三世益物は依正三千にして釈尊一仏の仏恩なり。故に寿量品を提婆品に移して云く、「智積菩薩言我見二釈迦如来一於二無量劫一難行苦行乃至為二衆生一故、然後乃得レ成二菩提道一」云云。寿量品に云く、「我成仏已来復過二於此一百千万億那由他阿僧祇劫。自二従是一来我常在二此娑婆世界一乃至教化令レ入二仏道一」文。三世益物の医師の譬云云。「我亦為世父」乃至「今此三界皆是我有 其中衆生悉是吾子」文。有とは三千の国土、子とは三五七九の九法界なり。此の依正も皆釈尊一仏の示現にして益物の故に大願を発し、日月とも成り草木・国土とも善男善女とも成りて物を益す。其の大恩、諸仏に勝るること百千万倍なり。

と。法界の依正万法悉く本仏所証の事具三千の荘厳、釈尊慈悲の示現の功徳なることを諒すべきである。

すでに法界の万法、事具三千の妙法なれば、依正互融・情非情不二なる故に、釈尊・上行即土地草木、土地草木即釈尊・上行である。宗要集雑部、草木成仏の項に云く

此の久遠本地の依正、三世間一体不二にして、依即是正、正即是依なる故に、依正不二の正報の方より照見すれば本因本果十界久遠の本身は釈尊・上行なり。又依正不二の本国土妙依報の方より照見すれば本果釈尊・本因上行九法界も本国土妙の土地草木、本来所具の当体蓮華の妙法自受法楽の本因妙名字信行初発菩提心の土地草木、地水火風にして上行等の四菩薩なり、故に地涌菩薩と云ふ。計り知んぬ、上行等の四菩薩と云ふは草木が発心修行して仏

に成る異名なり

と。かくの如く万法が事具三千を具して依正不二なれば、正報の本因本果の釈尊上行と依報の土地草木と一体不二の成仏と成る。故に依報の草木も本因本果を具し、他の正報たる聖衆の証悟照見の力を借らずして、草木独立して発心修行し以て久遠成道を遂ぐるのである。草木に本因妙を具するが故に草木自ら事相に発心修行し、また草木に本果妙を具するが故に草木自ら成道すべきである。これが草木独立の成仏であり草木自依心の成仏であり、これが真の事相修得の草木成仏である。

かくの如く非情の草木に本仏釈尊・本化上行が存する。されば隆師は

釈尊も久遠の本行菩薩道の時に、此の界の本国土妙の大地より涌出したまふ故に、提婆品の「観三千大千世界」已下の文の如く、釈尊の御身は草木土地なり。之より上行等の四菩薩は従地涌出する故に、法界土地の地水火風、即ち上行等の四菩薩なり。……久遠成道の本果釈尊、本因上行ばかり草木成仏の仏菩薩なり。是れ即ち草木成仏の本尊なり（宗要雑部）

といはれている。文中の釈尊・上行を以て草木成仏の本尊なりというのは、これ究竟の宗義よりすれば総別二義の中には別体本尊であって、総体本尊たる南無妙法蓮華経の体内所開である。この故に隆師はこの文につづいて次に

涌出品の初に仏滅後の木画二像開眼供養の本尊と唱導とをば、止善男子等と云って前三後三の六釈の意を以て迹化他方に付せず、上行等ばかりに付するなり。故に当宗の本門三大秘法は草木成仏の本尊なり。草木受戒の戒壇なり。草木口唱事行の南無妙法蓮華経なり。此の三大秘法の総体は本地の妙法蓮華経なり。……以要言之の要法は草木成仏の本尊にして、滅後の木画二像開眼供養の本尊なりと云ふこと疑ひなきものなり。

と示されている。これ実に当家本尊義の極説である。

四　草木の発心修行の事相成仏

さきに述べた荆溪・伝教乃至宝地房等の天台家に論ずる草木成仏義は迹門所詮の理具一念三千の教理を基盤とするものであるから、「成仏とは発心修行にあり故に草木成仏は発心修行の成仏なり」と称するけれども、結局は草木の理具性徳の成仏であって、未だ草木の発心修行の事成修徳の成仏ではない。

天台大師は摩訶止観一（台師全止一―一八四）の発大心の下に、質多・汗栗駄（カリダ）・矣栗駄（イリダ）の三心を分別して、カリダ・イリダの二心を簡んで専ら質多心をもって発菩提心の基本としている。即ち

今非ヲ簡ブトハ積聚・草木等ノ心ヲ簡ブコト専ラ慮知ノ心ニ在ルナリ

という。質多とは訳して慮知の心をいい、衆生の有する第六識たる思慮分別の心であり、カリダは訳すれば非情たる草木の心であり、イリダは積聚精要の心、即ち物質に宿る精要心、俗にいう「ものの精」というべきものである。止観の行人は質多の慮知心をもって発心すべきもの、いいかえれば止観修行の機は慮知心ある衆生であって、非情の草木や物質は止観修行の機でないというのである。何故であるかといへば輔行（同上一八五）には

凡ソ厥レ有情ハ皆悉ク発スルニ堪ヘタリ。是ノ故ニ但ダ積聚・草木ヲ簡ブ。二ハ心ト名クト雖モ此ノ発ナキ故ナリ。諸ノ衆生ハ無始ヨリ横ママニ計スルヲ以テス。此ノ横計ヲ指スニ即チ発スベキ故ナリ。

といっている。即ち菩提心を発す（おこ）心というのは有情が有する慮知心であって、草木に宿っている心や物質に内在する精要心ではない。衆生は能く発心するが、物質や草木では心を存していても発心することはない。何故かというに衆生は無始よりこのかた種々ほしいままに執着して来ている、この執着心があるからまた却て発心することができるのだというのである。

天台家は法華経中迹門をもって正意とし、迹門所詮の理具三千を以て依正万法の所具とする。正了縁の三因仏性の

実体は理具三千であって三因は不三一体であるけれども理性本具の正因仏性を根本として草木成仏を論ずるから、それは単なる理具性徳の成仏である。この故に止観の三千観においては衆生慮知の事心をもって発心とし、草木国土の理心を簡んだのである。されば天台家に依正互融一体不二の旨を論じているが、実際の止観修行には有情・非情の別を立てて非情を簡ぶ故に、実には草木の発心修行の成仏をば許されないのである。

しかるに本門正意の当家においては前述の如く、草木成仏の基本的原理は本門所詮の法体たる事具三千である。事具三千は本仏釈尊が行菩薩道の本時に己心本具の三千即ち本理の三千を証得し、この内証の三千をもって十法界の依正万法に示現し荘厳したのがいはゆる随縁事円の三千実相である。この故に提婆品の「観三千大千世界」[云云]の文の如く、この法界の森羅万象は本仏釈尊の本行菩薩道時の身心を捨てて示現したもうた分身の舎利であり、法界全体は本仏釈尊所住の常寂光土である。

ところで本仏によって証得された釈尊内証の本理の三千は依正不二、情非情一体、常同の実相であるが、本仏の内証より法界の現象界に随縁示現された万法は「三千世間依正宛然自受法楽」（伝全三五八三）の依正宛然の常別の事相世界である。即ち十界の正報たる聖衆と依報たる草木国土と依正不二の上の而二の世界、依正万法各々自受法楽の当体蓮華の常寂光土である。かくの如くこの十法界は「彼々三千互遍亦爾」（補行五上和四七ウ）で、本因果国依正互融するのであるから、本国土たる草木世間にも本果の釈尊、本因の上行が存していて、草木の本果妙釈尊は草木の本因上行九法界の衆生のために草木成仏の本説法をなし、草木の上行九法界の衆生は草木釈尊の草木成仏の本説法を聴聞して本因妙名字の信行をなして菩薩道を修して自受法楽するのである。これが寿量品に明す「我此土安穏天人常充満乃至宝樹多二花果一衆生所二極楽一」という自受用・他受用の万徳荘厳の本国土寂光娑婆の消息である。

しかしこれを更に進めて考えてみれば、草木自身が法界本理の三千を証得してこれを具現したものではなく、本仏

釈尊の大慈悲によって具得されたものである。このことは非情の草木国土のみでなく有情の聖衆においても同様である。故に一念に三千を具足しているといへども、それは自らの修行・証得による後天的修得の仏体ではなくて、衆生や草木自身にとって本来法爾具足の先天的性徳の仏種である。「仏種従二縁起一是故説二一乗一」でこの先天的性徳の仏種を自覚しこれを開発せしむべき教縁を必要とする。それが一念三千の仏種を内包せる妙法蓮華経である。この故に草木成仏の教主たる草木の本仏釈尊は草木をして本有性徳の事具三千の仏種を開発せしめんがために、本門八品を説いて久遠下種の妙法蓮華経を開顕し、これを草木の発心修行の上行菩薩に付嘱し、もって滅後末法の草木の衆生に下種せしめるのである。日隆聖人は

本門八品上行要付は草木成仏の釈尊、草木成仏の所覚の三大秘法を以て、草木の因行たる上行に付し、滅後草木の信者に授与せしめんが為なり。故に滅後の仏・菩薩の畫像・木像の開眼供養は本門八品上行付嘱の本尊に限るべきものなり。（宗要雑部）

と明されている。

上来述べた如く真の草木の発心修行の成仏は本門八品所顕の久遠下種の妙法蓮華経によらなければならない。草木自身が妙法蓮華経の乗種を聞法下種することにおいて、己心本具性徳の事具三千の種子を自覚し発心信行して始めて成仏を遂げ得らるるのである。

以上が日隆聖人の草木成仏に対する独自の解説であって、これ実に草木成仏の終窮究竟の極説である。ここに至って始めて草木の発心修行の事相成仏及び草木自依心の独立成仏が明了となり、また草木成仏の教経、草木成仏の本尊並びに木絵二像開眼供養の真意も解明されたものと思われる。隆師にはこの外になお草木成仏に関する解説が存するがこれらについては開迹顕本宗要集雑部の草木成仏の項を披見せられたい。

結　論

わが宗祖日蓮大士が

天台・伝教等の御時は理なり、今は事なり。……彼は迹門の一念三千、此は本門の一念三千なり。天地はるかに殊なりことなり（二一〇三）

といはれている如く、彼の天台宗は法華経に依って立宗すといへども、迹門を正意とする故に迹門所詮の理具一念三千の理法をもって草木成仏の原理とし、わが法華宗は法華経においても本門をもって正意とする故に本門所詮の事具三千の法体をもって草木成仏の原理とするのである。以上述べ来った荆溪・伝教・智証・良源・忠尋・証真等何れも天台大師創発の一念三千・三諦円融の思想を基盤として非情仏性・草木成仏を論じているのである。

要するところ先づ荆溪大師は有情非情悉有仏性の義を立て、主として華厳宗の有情仏性・非情法性の義を論破した。華厳宗では有情は仏性を具し非情は法性は具するが仏性は具していず、仏性には覚知の能力あるも法性は覚知の力用はない、この故に非情の草木等は不成仏であるとする。これに対して荆溪は法性と仏性とは同一真如であってただ呼称の相違である。真如が諸法に在るときは法性とか実相とか称し、真如が衆生に具するとき仏性と名づけられるのである。この仏性には理・智・用の三性を具しているから、正了縁の三因仏性という。正因は仏性の理体、了因・縁因の二仏性は理体の正因を開発顕成せんとする力用であって、この正因の体と了縁の用とは体用不二一体である。有情・非情共に同一真如を具し三因仏性を備へている故に両者倶に成仏すべきであって、非情のみ無仏性と説くのは浅識短見であると破斥したのである。

次の伝教大師においても立論の根拠は荆溪と同様である。ただ荆溪は主として華厳宗の非情無仏性の義に対して非

情有仏性の義を立てたのであるが、伝教は法相宗の五性各別説に対して真向から法華経の一性成仏説を主張したのである。法相宗は仏性に理・行の二があり、理仏性は真如そのものでただ万法の依止所となっているもの、これには覚照の徳用はない。行仏性は覚知の功能を有していて仏徳を顕成するが万法一切に普遍ではない、勿論これは非情には具することなく有情においても二乗性の者・本来無性の闡提には具へていない。この行仏性を具へる者は菩薩性の者と三乗不定性の者のみである説くのである。これに対して伝教大師は真如は単なる万法の依止所のみでなく、万法を随縁縁起して万法に具しているものである、この真如は理・行の二仏性、正了縁の三因仏性である。二仏性は不二一体、三因は不三一如であるから、有情非情悉有仏性で二乗も闡提も草木も成仏すべきであると主張したのである。

この荆溪・伝教における一切衆生悉有仏性の仏性は天台大師証発の一念三千即ち迹門所詮の実相に外ならない。ただ彼等は華厳・法相という縁起論系の教理に対論したので天台になかった真如随縁の義を出して真如に不変・随縁の二面あることを説いて非情仏性の義をあらはしているのが特色である。

次の智証大師に至っては密教の立場から無情成仏の義を立てているが、その思想的根拠はやはり天台の一念三千である。彼は一念三千の理体を大日如来とし情非情一切は大日如来の金胎両部より出生したもの、故に一切は大日如来に帰一することにおいて成仏するのであるといって、三密加持の事相を以てしたことが特徴である。この事相事業を主張したことが後の草木の理性成仏の上に発心修行の事相成仏を唱へ出す根拠となったものであろう。

この故に次の慈慧良源に至れば、特に「草木発心修行成仏記」と名り出し、理性の草木成仏論より一歩進んで草木の発心修行の事相成仏を唱へ出したところにその進展がみられる。しかしそれは言のみで内容に至っては従来の理性論に過ぎず、具体的な草木の発心修行の面が説かれていないのが天台教学の域を出でざるところである。

次の東陽房忠尋にしても室地房証真にしても従来の草木成仏説を整理するに過ぎず、草木の発心修行の事相成仏を

説かんとする意欲は見えるがその明了なる論理はない。これ台家の理具三千の法を根拠とする草木成仏論なる証拠である。

さてわが法華宗宗祖日蓮大士に至っては、天台宗所談の迹門理具一念三千義の上に更に本門事具一念三千義を立て情非情一切成仏の原理とせられた。この故に草木成仏もこの法体による成仏でなければならない。とはいえ非情の草木国土といへども本仏の無量劫における難行苦行の捨身命処によって顕された本仏分身の舎利であるから、本来事具三千具足の仏体たる存在である。しかしこれ本仏の久遠の修行によって下された仏種であって、草木自身にとってはこれ本有性徳の種子、草木自らの聞法発心による仏種子ではない。仍てこの本具の仏種を開発し、顕成すべく新たに教法の種子を種えなければならない。この教法の種子を一念三千を仏種というに対して乗種という。その乗種は一念三千の仏種を詮説する本地の妙法蓮華経である。この故に草木自らが聞法発心してこの妙法蓮華経を下種することにおいて、草木本具の一念三千の仏種を開発して成仏すべきである。これが草木の下種成仏、草木の発心修行の成仏、草木自身の独立成仏である。これが一期の大事・当身の大事と仰せられた開目抄・本尊抄にあらはれている宗祖内証妙解の草木成仏義である。

されば天台家において未だ草木の発心修行の事相成仏、草木自身の独立成仏を論証し得なかった草木成仏論がわが宗祖に至って始めて主張されたものである。

この宗祖大士の草木成仏の真義が宗祖の滅後に至って漸く中古天台の教義が浸入するに従って却って天台の理具思想に逆戻りして行ったために全く失はれるに至った。ここに日隆聖人が出現して宗祖の真義を発揚せんとして委細条理的に解説されたものがいはゆる日隆聖人の草木成仏論である。隆師は宗祖の本懐に準拠して、草木成仏の付嘱、滅後草木成仏の本尊を説き、而して滅後に於ける草木の下種成仏を論じている。ここにおいて草木成仏の真義が究竟し

たといえよう。

かように観て来ると草木成仏の法門はもと無情仏性の義より始まっている。荊溪にしても伝教にしても最初から草木の成仏不成仏を問題にしたのではなく、華厳・法相の非情無性に対して非情有性を主張して来たので草木成仏の問題が主眼であったのでない。伝教大師の如きは法相宗の二乗・闡提不成仏の義に対して、二乗・闡提成仏の義を立てんとして情非情一切悉有仏性の旨を主張したのであって、草木成仏よりもむしろ非情仏性の問題が主題であったといえる。ただ有情の二乗・闡提にしろ非情の草木・国土にしろ悉有仏性の義に変りはないから、後世の草木成仏の問題よりして荊溪・伝教の所説を草木成仏論として受取って来たのである。専ら草木成仏の主題のもとに仏性義が論ぜられたのは恐らく良源以後であって、而もこの頃より理性の成仏でなく草木の発心修行の事相成仏が唱へ出されたのである。わが宗祖大士においては真言の木絵二像開眼を対破すべく、草木成仏義が論ぜられ木絵二像の意神並びにその開眼は必ず法華経によるべき旨を主張せられたのである。隆師は宗祖の本意に随順して天台家の草木成仏論を開迹顕本して草木の下種成仏を論ぜられたのである。

以上要するに本宗における草木成仏は本門八品所顕上行要付の妙法蓮華経によらねばならない。従って滅後の本尊たる木画二像のマンダラにおいては、別体たる一念三千の法体よりも一念三千を総在せる能摂総名の南無妙法蓮華経を以てその正体とすべきである。されば宗祖大士は本尊抄において、その第一段には初め迹門理具一念三千より説き起し、漸次本門事具一念三千にまで導き来って、この事具一念三千の法体を以て草木成仏の原理、木画本尊の意神となし、第二段の本尊正顕に至って

此本門肝心於二南無妙法蓮華経五字一……但召二地涌千界一説二八品一付二属之一

と本門八品上行要付の総名妙法蓮華経を提示し、この総名妙法蓮華経を滅後の木画本尊の正体として「其本尊為レ体」

等と久遠本時の十界マンダラの体相を明し、而してその結成として

如レ是本尊在世五十余年、無レ之、八年之間但限二八品一

と再示されたのである。而して最後第三段の結論において

不レ識二一念三千一者仏起二大慈悲一五字内裏二此珠一令レ懸二末代幼稚類一

と末代の衆生にその信行を勧奨せられたのである。

かくの如く本宗における草木成仏の原理、滅後の木画本尊の意神は八品所顕上行要付の総名妙法蓮華経である。従ってその本尊の開眼供養はこの大法に限るべきことを了解すべきである。